

技術者はさまざまな価値を考慮しながら、多様な価値の間で倫理的に決断しなければならない。しかし、さまざまな価値のはざま で、技術者は当事者としてどのように意思決定を下せばよいのだろうか。第 6 章で考察したように、倫理学的理論が異なれば、倫理的考察の視点 も異なる。例えば嘘をつくという同じ行為についても、立場が違えば評価が異なることがあり得るのである。

したがって、倫理問題に、数学の解法のような明確な解決方法はないことになる。たとえ優れた倫理理論を構築できたとしても、それはある行為の 善悪に関する判定には役立つが、実際に倫理問題に直面している人の助けにはならない。なぜなら、問題解決のためには何らかの行為を考案しなければならないからである。倫理理論は、すでになされた行為の善悪の判定には役立つが、行為の考案には効力をもたない。また、倫理理論は、問題解決のための アルゴリズムを、倫理問題に関して提示することはできない。なぜなら、倫理的意思決定のためには、置かれている状況を倫理的に分析するたんなる分析能力だけではなく、取りうる行動を考案する創造力・構想力が要求されるからである。また、考案した行為を実践する意思の力も必要である。た だ、行為者(問題に直面している人)は、どのように行動するべきかという解決策をいくつか考え出したあとで、それらの選択肢を、何らかの基準を 使って比較検討し、判定を下す能力をもたねばならないので、この点においては、規範倫理理論は有効であろう。これらの点について、キャロライン・ウィットベックは、「行為者(つまり問題に直面している人)は為すべき行動をいくつか考え出したあと、それらの選択肢を比較検討する判定の能力を必要 とする。しかし、その判定の能力は、行為者が倫理問題に対処するためのほんの一部でしかない。大切なのは、候補となる対応策を考案し改良するという建 設的な能力、あるいは総合的な能力などある」としている。

すでに述べたように、倫理的な問題の解決とはさまざまな価値の間の適切なバランスをとることである。そして、そのバランスのとり方は 状況や人によって異なる。例えば、自動車は、安全性・性能・コスト・耐久性・デザイン・環境負荷・部品のリサイクル・燃費などいろいろな価値の バランスをとって作られる。しかし、市場に無数の車種が出ているということは、誰もが認める完璧で唯一絶対的な車はないということの証拠である。倫理的な問題の解決についても同様で、この意味で、ウィットベックが主張するように、倫理問題とエンジニアが日常的に行う設計問題は似て いると言える。

第 1 の類似点は、どちらの問題もすべての関連情報がわかっているわけではなく、限定されたあるいは曖昧な情報を基にして意思決定をしなければならぬという点である。第 2 点は、

問題の解決策や対応策がただ 1 つ、あるいはマルチプル CHOICE 問題のように、限られた数しかないという ような状況はほとんどありえないという事実である。第 3 の類似点は、唯一絶対的な解はないが、解の間に優劣はありうるし、明らかに誤った解は存在する という点である。倫理問題と設計問題が似ている第 4 の点は、どちらも与えられた制約条件の中で、複数の「価値」を同時に満足させるように、問題を解決しなければならないということである。

ただし、倫理問題と設計問題で大きく異なる点もある。それは、われわれが直面する倫理問題は常に時間軸を含み、動的であるという点である。問題解決のために、一連の行動を考案し、それを実行に移したとしよう。最初の行為を為した段階で、その行為は、ステークホルダーに影響を与え、あなたを取り巻く状況を変化させる。すると、次に為すべき行為を取り巻く文脈が影響を受けることになる。

功利主義の立場に立ち、1 つの行為が、選択肢にあった別の行為よりもよい「結果」をもたらしたかどうかを判断することは、タイム・マシンが 発明されない限り不可能である。この意味でも、現実社会で人が直面し、何らかの対応をしなければならない実践問題としての倫理問題には唯一の正解はない。この点は、倫理問題を考えるうえで決して忘れてはならないポイントである。

ウィットベックも、技術的な設計は技術者の人たちが日常的に行う仕事の一部であるので、このような比較によって倫理問題を身近に感じる ことができるであろうと指摘している。このアナロジーをさらに進めて、倫理問題を解決するということは複数の価値を満足させることができるように、自分が取るべき行動を「設計」することだと思えることができる。例えば、自分が担当する製品の安全性をより高めるために、上司がすでに決めた素材よりも高価な素材を使うという意思決定をしたとしよう。これを実現するためには、単に自らの選択の正当性を主張するだけでなく、上司を説得するための情報を集めたり、説得の手順(例えば、他者からの援護を依頼する)を考えたり、コミュニケーションを含めて、自らの行動を「設計」する必要がある。このような「設計」を行うさいの、基本となるのが、倫理綱領などに示された価値なのである。

引用：札野順. *新しい時代の技術者倫理*. 放送大学教育振興会, 2015. pp.118-120